

▲ 見てのとおり、とうしゃ印刷の部分が少なくなつて、その分タイプ・オフセット印刷の部分が多くなつた。つまり、ガリ切りの手間とヒマが少なくてすむようになった。

▲ しかし、楽になつた、と言つてしまつては、ガリ切り人の身勝手なコトバになつてしまふ。苦あれば楽あり、楽あれば苦あり、でその分タイプ打ち人の手間とヒマがかかつているのだ。

▲ ならば、前と同じやないか、ということになるかも知れんが、そこが、やっぱりちがうのだ。来月から原稿のしめ切りを毎月二五日にできるのだ。(今までは毎月二〇日) 付録のハガキでいいから送つてや。

▲ 三三ページの「かえうた」のハナシを読んで、作つて送つてみよう。あんまり、××××なもの、××××なもの、は残念ながら、お上の目がうるさいのでせられないかもしれない。で、その場合は、編集委員だけが読んでニヤニヤすることになる。もっとも、この場合でも、作る本人が一番楽しいのかもしれない。やっぱり作ってみよう。

▲ 先月号に「寄せ場」と「寄り場」など朝日新聞の無知について」というのをのせた。そして、朝日新聞の「不況飯場」という連載について少し書いて、連載のつづきについてまた改めて書く、と予告したが、まア、何も書くほどのことはなさそうだったのでやめた。

▲ 最近、早めに売り切れるようになった。先月号がほんの少し残っているだけで、あとは全然残つてない。こゝとわつておく。

▲ 先月のある日、「日之本」の前で一人の仲間が衣類と共に、この雑誌を売つた。オレはちよびりさびしかつた。でも、二号、三号、四号、が一冊ずついいねいに並べられてるのを見て思った。また他の仲間にも読まれるんだから、その方がいいかもしれない、と。そしてレもシノゲなかつたらアアしよう、と。

▲ 途中のさし絵なんかも書いてや。ハガキに黒のボールペンかサインペンで書いて。

▲ 景気が悪くなると思つたら、オカマがふえる、という。ホント。多いネ。アア、やけくそで買った馬券があたるワケはなし、富ますます富、貧ますます貧、とはよくいったものだ。(T)

定価・一〇〇円  
(送料五五円)

労務者渡世六月号  
(通巻第七号)

一九七五年六月八日発行  
(毎月八日発行)

▲ 編集発行 ▼  
「労務者渡世」編集委員会  
代表・中原哲也

▲ 連絡先 ▼  
(郵便番号五五七一九一)  
西成郵便局私書箱第三一号  
郵便振替口座・大阪二七八三五